少年の日の思い出 (5)

ヘルマン・ヘッセ
高橋 健二 訳

（クジャクヤママユをつぶしてしまった「僕」は、母に促され、エーミールのもとを訪れました。エーミールはクジャクヤママユを直そうとしているところでした。）

壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかし、それは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだ、と言い、詳しく話し、説明しようと試みた。

　すると、エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちぇっ。」と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから、

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」

と言った。

　僕は、彼に、僕のおもちゃをみんなやる、と言った。それでも、彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は、自分のちょうの収集を全部やる、と言った。しかし、彼は、

「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がちょうをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」

と言った。

　その瞬間、僕は、すんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。<u>もうどうにもしようがなかった。</u>僕は悪漢だということに決まってしまい、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。彼はののしりさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

　そのとき、初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、構わずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、「とこにお入り。」と言われた。僕にとってはもう遅い時刻だった。だが、その前に、僕は、そっと食堂に行って、大きなとび色の厚紙の箱を取ってき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そして、ちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線部「もうどうにもしようがなかった」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　エーミールのクジャクヤママユを台無しにしてしまい、直しようがなかったということ。
イ　エーミールにクジャクヤママユを盗んだことが知られてしまい、隠しようがなかったということ。
ウ　エーミールにちょうの収集の受け取りを断られてしまい、埋め合わせのしようがなかったということ。
エ　エーミールが正義で自分が悪だということになってしまい、これをくつがえしようがなかったということ。

〔　　〕

(2) エーミールへの謝罪を通じて、「僕」はどういうことを理解したか。解答欄に合うように、本文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□ということ。

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　エーミールは「僕」の謝罪を受け入れ、「僕」の償いの申し出を丁重に断った。
イ　エーミールは「僕」がちょうを台無しにしてしまったことを知り、強くののしった。
ウ　「僕」から見たエーミールの態度は冷淡なもので、「僕」をただただ軽蔑するものだった。

〔　　〕